幼児期の道徳性の芽生えに関する一考察
―― ペープサートを通した道徳的判断を通して――

学校教育専攻
教育臨床コース
前田　美代

指導教官　浅野　弘嗣

1．問題の所在

最近のマスコミが取り上げる少年や青年の反社会的行動には，大人のいろいろなところでの歪みの影響がここまで及んでいるのかと思わせるものが多い。彼ら・彼女らの，対社会への行動はもちろんのこと，対親・対同朋への行動も日増しにエスカレートしている。このことに対して大人は，少年期や青年期の問題行動は，その時期特有であると捉えて対症療法的に解決策を立ててきた。しかし，子どもはある日突然に少年・青年へと姿を変え，しかも問題行動を起こすのではない。保育所（幼稚園）期や小学校期の子どもたちの実態を把握して根本的な見直しが必要だ。人間は毎日の生活の積み重ねの中で，自らを積み上げ個を形成していく存在である。各段階，特に幼児期の段階での諸要因がその後の育ちにいろいろと大きな影響を与えることを先行研究がすでに明らかにしている。筆者は諸先行研究の中でも，こと幼児期の道徳性の研究に至っては絶対数が少ないところに着目している。上述行動はまさにそこに一因があると考えるようになった。そこでまずその育ちの芽生え期としての幼児期（３歳～６歳）につながる近接領域の研究に当たることにした。

2．研究の目的

幼児期の子どもたちに関する諸方面からの先行研究を取り上げることによって道徳性の芽生えへのアプローチを試みた。その中で筆者は，“道徳性の芽生えを培う”ということは，ある特定の倫理観を幼児に教えればよいというのではないこと。もちろん，幼児が集団生活をしていれば自然に身に付くものでもないこと。幼児の心の中に芽生える，“人への興味や関心”・“相手に合わせようとする心”への働きかけをすることの把握から見直してみようとした。それには幼児の発達を踏まえた教師の働きかけが重要となる，と考えた。すなわち，道徳性の発達は，乳幼児期からすでに持っている他者への興味・関心や他者の行動に合わせようとする基本的な信頼に始まり，やがて他者との共感性を豊かにさせながら，自他両方の視点を考えて自己の欲求や行動などを調整できるようになる過程を経て達成されていくものである，というところにたどりついた。

そこで研究の目的として，ペープサート手法を用いた“お話”を通して，「将来の善悪の判断につながる，やってよいことや悪いことの基本的な区別」を発達の早遅との関係から探るとともに，日常の行動の観察と比較して，幼児期における道徳性はどのように培われていくのかを捉えようとした。

3．研究の方法

上記のような実験を通して，道徳性の芽生えを見ようとしたのは，アンケート調査からアプローチしていくよりも，生身の回答者である幼児一人ひとりから教えてもらえれば，と考えた

からである。実験については次の通りである。

ペープサートを用いた理由：登場人物が動くので，幼児が興味をもってくれるだろうし，それだけではなく幼児が自由に触ることができると考えたからである。

ペープサート場面の選定まで：①A保育所で絵本の読み聞かせをしていただき，反応のよかったものを教えていただく。②絵本をペープサートに変換する。③予備実験児の反応をもとに“お話”を作る。

実際の実験：①対象はT県N市立A，B，Cの各保育所に通う幼児，37名である。②実施期間は2002年6月19日から10月22日である。③保育所の一室で，筆者と幼児が向き合う状態の個別形態をとり，ペープサート4種の場面で主人公が取った行為の善悪の判断をしてもらい，その理由を教えてもらう。

4．結果

実験から見えてきたことは，次の通りである

①幼児の判断基準は，日常生活に基づいている場合が多い。

②3歳児は自己を中心に置いて判断する。

③4歳児になると判断に固着化の傾向が出てくる。

④認知発達の逐語としては，他児の物まね的判断から“自己”の芽生えに移っていく。

⑤道徳性の芽生えにも個人差があるが，

⑥実験を行うにあたって，実験者との人間関係に左右される。

⑦実験にあたっては，実験期間への配慮や幼児の集中力が切れてしまわないようにする必要がある。

5．研究のまとめ

道徳性の芽生えや発達について一瞥した型のものになったが，これまで筆者は，研究目的を踏まえて幼児期の道徳性の芽生えについて考察をすすめてきた。また，保育士さんたちからともお話させていただいた。それらのことから，次のようにまとめることができる。

①道徳性の芽生えには個人差があり，一概にどの時期であるとは言いがたい。

②道徳性の芽生えを培うにあたっては，日常生活における幼児への働きかけが大切である。

③幼児期においては特に幼児と保育者の信頼関係が重要である。

④幼児期の道徳性の芽生えを培うことは，人間関係の基礎形成と同義である。

6．今後の課題

子どもの道徳性に関することでは，家庭，保育所（幼稚園）での生活，当該幼児の生育歴，生活習慣の確立，情緒の発達，社会性の発達，身体的発達，知的発達との関連を考えることがあげられる。また，実験対象児の絶対数を増やすということも課題である。

次段階の保育・教育機関へのつながり・幼児の授受の問題についても考える必要がある。その中で，生涯にわたる道徳性を培うところのある一時期の支援のあり方を考えていくことが重要となる。

道徳性を捉えるにあたって心情との関係を見ていく必要もある。

子どもの行動に働きかけることで道徳性，強いて言うならば判断の基準，がどのように確立していくかを検証する必要がある。

道徳性の芽生えを捉える実験を行うにはどれくらいの人数で行うのがよいのかを考えてみる必要がある。

人間関係の基礎形成を十分に図った上での実験につなげていく手法を考慮しなければならない。